

研究ノート

戦後社会科学の視座旋回と一般の人びとの「個」として自己形成

——寺田光雄『生活者と社会科学——「戦後啓蒙」と現代』新泉社、2013年を読む——

若森章孝

### 要約

日本の社会科学がめざすべきは、人びとの生活意識に根ざした社会科学、つまり、自生的社会科学の形成である。しかし、グローバル化のもとで、従来の体制的な序列的価値観が弱体化し、そこから放り出された人びとが「個」として自立化を要請されているにもかかわらず、社会科学の現在は、一般の人びとの自己形成の内的・思考的拠りどころになるという役割を果たすことから程遠い状況にある。社会生活や政治において人びとに当事者意識を定着させるという主体化を模索した戦後社会科学は、高度成長が生み出した広範な人びとの個人主義的自己形成にかかわることを通して、社会科学的認識と人びとの自己形成とを一体化して理解する当初の立ち位置から、人びとの自己形成・生活意識に寄り添うかたちで社会科学的認識を捉える立ち位置への視座の旋回を推し進めた。人びとの自己形成の多方向性という今日の文脈において、社会科学が人びとの内的・思考的拠りどころの手がかりとなりうるには、戦後社会科学の視座旋回や人びとの自己意識の実存基盤の変容を参照軸にして、社会科学者の立ち位置や当時者性の問題を改めて問い直す必要がある。

キーワード ; 戦後社会科学 ; 「主権在民」理念の主体化模索 ; 内田義彦の錯誤 ; 通俗道徳 ; 等身大の自己形成 ; 自己形成の多方向性 ; 社会科学者の立ち位置 ; 生活者の側からみた社会科学

経済学文献季報分類番号 ; 01-10;01-21;02-11;03-10

### 1 本書の課題と構成

本書は、社会科学的認識と人びとの「個」としての自己形成との関連をこれまでの誰よりも深く思索して、この関連に含まれる諸問題の究明を日本の社会科学の未踏の主題として提起し、それをしなやかな思索を通して描き出した画期的な研究である。著者はこの主題を、①普通の人びとの自己形成の視点を取り込もうとした戦後社会科学における視座の旋回を観察し跡づける(第1部)、②高度成長期以降の広範な個人主義的自己形成の登場とその背後にある、人びとに「個」としての内的・思考的拠りどころの形成・獲得を要請する自己意識の実存的基盤の変容を、いくつかの事例の観察によって描き出す(第2部)、③人びとの自己形成と社会科学者の立脚点との関連を考察し、「個」としての内的・思考的拠りどころとして手掛かりになりうる社会科学のあり方を総括的に議論する(終章)、という重層的な観察と思索によって展開していく。評者は本書を一気に読みながら、内田義彦の『経済学の生誕』を読んだある人が「トイレに行く時間をもったいないほどおもしろかった」と書

いているのを思い出した。評者は社会思想史の専門家ではないし、経済学や政治学から教育学や歴史学、民衆史、現代美術までの問題を扱っている本書は守備範囲を超えるものであるが、本書から受けた感動とインパクトを伝えることから逃れえないように思い、465ページに及ぶ歴史の流れのような大著の解説を思い立った次第である。「人びとに要請される『個』としての内的・思考的拠りどころにかかわる社会科学のあり方」(225)が主題としてつむぎ出されていく本書は、学部学生のときから現代美術の動向にも関心をもち続けている一人の社会科学者の思索の積み重ねと、事例として観察された人びとの自己形成との対話と交流から、いわば「奇跡」のように生まれた作品である。

本書は次のような構成で描かれている。

まえがき——本書の課題と構成

第1部 戦後社会科学の視座旋回——「主権在民」理念の主体化をめぐる

序章 自生的社会科学の形成にむけて

第1章 丸山真男の模索——戦後社会科学の一代代表者

第2章 内田義彦の模索——主体化をめぐる視座の旋回

第1節 内田義彦を観察する視点

第2節 丸山真男と対比して

第3節 『社会認識の歩み』に至るまで

第4節 『社会認識の歩み』の展開〔その1〕——論理構成上の問題点と今日的可能性

第5節 『社会認識の歩み』の展開〔その2〕——個人主義的な自己形成との対話とその今日的意義

第6節 『社会認識の歩み』の展開〔その3〕——個人主義的な自己形成と内田の系統だった社会科学的認識とのズレ

第7節 主体化をめぐる視座の旋回

第3章 歴史学における主体化模索の展開と視座の旋回——特に安丸良夫の模索を事例に

第1節 新潮流の歴史学

第2節 安丸良夫の模索

小括

第2部 生活者の側からみた社会科学へ

第4章 観察の対象

第5章 「個」としての人格的成長論——戦後改革期から高度成長期への展開

第1節 戦後の出発時にみられた「個」としての人格的成長論——『山びこ学校』にみられた「通俗道徳」的生き方

第2節 教育行政の集権化と経済成長政策

第3節 人びとの生活様式の変容——美術教育の現代化が指し示すもの

第4節 大田堯の模索——抽象化された一般化された「個」としての人格的成長論

- 第5節 大田堯が脱ぎ捨てた社会科学的考察
- 第6章 等身大の自己形成が求めるもの
  - 第1節 長谷川宏・長谷川摂子の「赤門塾」の模索
  - 第2節 国際 NGO・日本国際ボランティアセンターの人たちの模索
- 終章 生活者の側からみた社会科学へ——社会学者の立脚点について
  - 一 社会学者の立脚点と地域的周縁性
  - 二 自己形成の多方向性と社会学者の立ち位置
- 付録 歴史認識の形成にかかわる小編
  - 一 研究動向 歴史認識形成の現況 グローバリズム下でのその主体的・客観的危機をめぐって
    - 補論 歴史を見る視点と視界の変化
  - 二 歴史教育・受けての立場への模索〔1〕
    - わたしの講義現場から
  - 三 歴史教育・受けての立場への模索〔2〕
    - 書評 鳥山孟郎『授業が変わる 世界史教育法』
- あとがき
- 参考文献

## 2 本書の内容と論点、戦後社会科学の視座旋回の参照軸と規定的論理

「まえがき」で著者は、社会科学がかつてに比べ一般の人たちに縁遠いものになっている現在を深刻に受けとめて、「社会科学は今、一般の生活者に対してどういうあり方で存在しているのか、どういうあり方であればより有効な役割を果たしうるか、を考えることです」(15)という本書の課題を述べる。そして、「社会科学は、社会諸事象の因果関係についての解明を軸にして、個々人が生きていく、あるいは生活していく上での諸問題を説明する学問として、人びとが人生や生活を考えていく上での手がかりを与える一つになります」と定義する。

第1部の課題は、戦後社会科学による、主権在民や平和主義といった「民主化理念を個々の人たちの自己形成（自己認識と世界認識の形成）に定着させようとした模索、つまり、政治や社会生活の広い面で人びとに当事者意識を定着させようとした模索」を「主体化模索」と呼び、戦後啓蒙の社会学者がこの主体化模索をどのようにおこなったのかを、一般の人びとの自己形成とのかかわりにおいて観察することである。著者は、経済思想史の研究者、内田義彦（1913－1989）の主体化模索のなかに、一般の人びとの自己形成を抽象的・理念的に組み立てた枠組みで「上から見下ろす」社会科学から、人びとの自己形成に寄り添うかたちでの主体化を模索する社会科学（一般の生活者からみた社会科学）への視座の旋回を発見する<sup>1</sup>。第1部をこの主体化をめぐる視座の旋回を参照軸(強調の傍点)とし

<sup>1</sup> 戦後啓蒙の社会科学の主体化模索の歩みを一般の人びとの自己形成とのかかわりあい

て構成するために、内田義彦の主体化模索を観察する第2章のいわば「前座」として、第1章で主権在民の理念の主体化模索を理念主義的な発想でおこなった政治学・日本思想史の研究者、丸山真男（1914-1996）の主体化模索を検討し、第3章で内田義彦よりも一般の人びとの自己形成・生活意識にさらに寄り添うかたちで主体化をめぐる視座の旋回を推し進めた歴史学者、安丸良夫（1934年生まれ）の研究の歩みを考察する。戦後啓蒙の社会科学を検討したほとんどの研究、例えば小熊英二『<民主>と<愛国>』（小熊 2002）では、個人主義とナショナリズムを結びつけることで近代化・民主化の理念を人びとの主体性として定着させようとした丸山真男が、経済史家・大塚久雄（1907-1996）とならんで、当時の集団的心情を社会科学の用語で表現した戦後啓蒙の主役として扱われているが、本書では、主体化をめぐる視座旋回を鮮明にする研究のための「引き立て役」として位置づけられている。

序章では、自立的思考を妨げる日本社会のあり方、とくに天皇制支配の呪縛を克服して社会の批判的主体として自己形成するのに、丸山真男や竹内好、久野収、家永三郎、内田義彦、小田切秀雄といった戦後啓蒙の代表的知識人さえ時間がかかった、ということを目指しながら、日本の社会科学が「目指すべきは、日本の人びとの生活意識に根ざした社会科学、つまり、自生的社会科学の形成」である、と提唱する。

第1章は、当時の知識人たちに大きな衝撃をあたえた1946年の論文「超国家主義の論理と心理」（丸山 1964、所収）において、自主的人格や主体的責任意識の欠落を日本の近代化の特質ないし病弊と認識した丸山真男が、「フィクション」制作としての思考のはたらきを思考軸に、政治制度や社会機構のあり方は主権者である人びとの意思によるもので改変可能であることを人びとに自覚させるのに社会批判の重点を置きながら、敗戦によって天皇主権に取って代わった主権在民の理念の主体化を模索した、ということについて考察する<sup>2</sup>。著者によれば、丸山のメタフィジカル（＝超肉体的）な思考軸は、日本の社会科学の自生化に必要ないくつかの論点（近代的知性の輸入移植的体質の克服、学会レベルでの批判的知性の確立）を鮮明にするものであったが、その精神的姿勢は知識人または都市教養層の世界に目をむけるものに限定されていて、一般の人びとの自己形成に寄り添って主権者意識の形成にかかわることは方法論的に生まれえなかった。著者は、自由な認識主体、倫理的責任主体、秩序形成の主体といった「強靱な自己制御力を具した主体」の確立を志向する丸山の主体形成論の限界と行きづまりを強調している。

---

において観察し、そこに（丸山真男と内田義彦のあいだで）視座の旋回が生じている、という指摘は活目すべき認識であって、戦後社会科学の研究に新しい視角を提供するものである。

<sup>2</sup> 戦前および戦後の生産力への自発性（主体性）の動員という視角から、戦時の総力戦体制と戦後啓蒙の社会科学との連続性を強調する動員説（中野 2001；恒木 2013）に対して、著者は、1946年の論文「超国家主義の論理と心理」において天皇制の精神構造と責任意識の欠如を解明して知識人に衝撃をあたえた丸山真男といえども1945年8月15日以後に主権在民の理念を自分の思想に定着させるうえで思想的葛藤のプロセスを経験したことを指摘している。中野や恒木が動員説の立場から戦時と戦後啓蒙の連続説をとるのにたいし、著者は非連続説の立場をとっている。

第2章で著者は、1960年代から1970年代の若手研究者(著者自身や評者を含む)に大きな影響をあたえた、内田山脈と呼ばれる一連の著作、『経済学の生誕』(内田 1962)、『資本論の世界』(内田 1966)、『日本資本主義の思想像』(内田 1967)、『社会認識の歩み』(内田 1971)、『学問の散策』(内田 1974)、『作品としての社会科学』(内田 1981)、『読書と社会科学』(内田 1985)を取り上げる。著者は、内田義彦の主体化模索のなかに、「戦後啓蒙の流れに立つ社会科学が、高度成長を経てそれまでの発想の限界に気づき、一般の人びととの対話を組み込んで新しい展開にむかわざるをえなかった一例」を見出し、そこに一般の人びとの自己形成との関係づけをめぐる、社会科学の視座が旋回しているのを発見する。著者はこの視座旋回を、「俯瞰的で理念的な認識形成のあり方から生活者の自己形成をみていたのを、こんどは生活者の側から、社会科学のあり方をみることに視座を移していきます」(71)と表現する。著者によれば、『経済学の生誕』や『資本論の世界』において戦後啓蒙の社会学者に共通する理念主義的性格の限界(スミスやマルクスの世界から直接、日本での市民的人間の形成をみようとする論理の無理)にぶちあたった内田が、高度成長が生みだしてきた個人主義的な自己形成と対話しうる社会科学のあり方について模索する転機となったのが、『社会認識の歩み』である<sup>3</sup>。

『社会認識の歩み』(内田 1971)は、①内田が社会科学的認識の深まりの系統発生として展開するマキャヴェリー→ホッブス→ルソー→スミス→マルクスという社会科学形成史の諸結節点を、一人一人のなかで社会認識が成長してくる諸結節点と対応して考える、②社会科学的認識の深まりを、社会を成して存在する個体の自覚の深まりと対応させて考える、③先ず断片を断片として読むことから始めて、古典が現代のわれわれに語りかける諸相を漸次立体的に読みとる実験をすすめてゆく(同上書 12)、という3つの軸に沿って、社会科学的認識の歴史と、社会とのかかわりあいのなかで個体として生きる営みを通して一般の人びとのなかに育っていく社会認識の芽との対話について、本の読み方の革新という方法を用いながら試みた「実験」である。

著者は、この内田の自生的社会科学を模索する実験のうちに、一般の人びとの自己形成の側からみた社会科学への視座旋回とともに、一般の人びとの自己形成を「彼が整理した系統だった社会科学的認識のあり方に引き寄せようとしたもので、戦後啓蒙の社会科学に共通する、主体化についての俯瞰的で理念的な見方を保持したもの」(71)である、という限

---

<sup>3</sup> 本書では、「戦後啓蒙」の社会科学の有力な潮流のひとつである市民社会派への言及がきわめて少ないが、市民社会派は、西欧社会を理想化した抽象的・理念的な枠組みで一般の人びとの主権者意識形成を捉えるという戦後社会科学の限界内にあるものとして位置づけているように思われる。著者は市民社会派のなかで、「思想史研究を日本の社会の現実を生きる自身の内部意識と渡り合わせるやり方でおこなってきた」(75)内田義彦だけがこの限界を超えたという認識を示している。第2章の注1において著者は、植村(2010)が内田の市民社会論を、「市民社会派マルクス主義」の成立とその終焉というテーマ設定のなかで他の市民社会論者と一括して議論している点を指摘し、本書の内田義彦論の独自性が市民社会論を対象とするのではなく、「戦後啓蒙」の社会科学の、生活者からみた社会科学への視座旋回という視角から内田の著作を観察するところにある、とのべている(151)。

界をも見出す。著者は、内田の系統だった社会科学的認識のあり方と生活者の個としての個人主義的自己形成とのズレを解明するために、内田のいう結節点を、①主権者意識を形づくる基本的な要件(主体的要件)と、②社会科学的認識を形づくる社会科学の構成要件に分けて整理したうえで、『社会認識の歩み』で提唱された結節点の3つの軸を次の4点に広げて議論する。

1. 「自分の眼でテキストを読む(社会の状況に主体的にかかわる)。
2. 公的な組織や制度は人間の生存や生活の保障のためにある、ということ認識する。
3. 人間は歴史のなかの存在であることを認識する。
4. 社会の動きは、個々の人間の行動の動機意思を超えて、人びとの行動が寄り集まった集合的な現象として生じる、ということ認識する。

1と2は個々人が主権者となるべき主体的条件であり、1と2を含む4点は近代ヨーロッパにおける社会科学の構成要件である。著者によれば、内田は、人びとが主権者意識(社会に対する当事者意識)をもつようになることを、系統だった社会科学的認識に引き寄せて考えようとするために、主権者意識の形成要件に社会科学の構成要件(1―4)のすべてを込めようとした。著者はこれを、「スミスやマルクスの論理抜きには主権者意識(市民的意識)の形成を考ええなかった、啓蒙家でマルクス主義者の内田の錯誤」(95)と呼んでいる。この錯誤のために、人びとの個体としての自覚の深まりへの案内をねらった『社会認識の歩み』は本の読み方論に変容せざるをえなくなった、というのである。以上の内田の主体化模索における視座旋回の今日的可能性とその限界についての分析は、本書を理解するうえで要となる議論であり、本書のもっとも重要な論点のひとつである。

第3章では、西欧の近代化を理念的モデルとした段階的で典型的な一国史観(マルクス主義や大塚史学の歴史像)の衰退に代わって1970年代に登場した、民衆の主体形成や心性、女性の自立などを認識対象とする新潮流の歴史学(民衆思想史、社会史、女性史)の主体化模索が観察される。歴史事象の系統だった因果関係的把握という社会科学的な歴史像構成と研究者個人の体験や内的対話との関係づけの多様な仕方のなかに、社会科学研究成果を受け手の側からみるという視座旋回が浮き彫りにされる。とくに近世から近現代の一般の人びとの生活意識にかかわる研究を「通俗道徳」論の観点からおこない、丸山真男の理念主義的な主体化模索に民衆史の次元で批判的に対峙した安丸良夫の民衆思想史研究の歩みのなかに、歴史学における視座旋回が跡づけられる。著者によれば、安丸のいう主体形成は、民衆の日常生活の律し方(勤勉、儉約、謙譲、孝行といった生活倫理)を軸とする人びとの自己形成を指していて、戦後啓蒙の社会科学が想定したような、社会一般のあり方についての認識を第一義的なものにしてはいない。本書では、安丸の「通俗道徳」論を参考にした、人びとの生活倫理を形成する自己意識の実存的基盤の変容が規定的論理(強調の傍点)として貫徹している。丸山が農村共同体を人びとの主権者意識の形成を妨げる元凶とみたのに対し、安丸は、西欧市民社会とは異質な主体性のあり方、人びとの生活倫理と社会倫理の形成のあり方を、農村共同体のなかに捉えようとした。

著者は、丸山の理念的な個人主義的主体性論に対する異議申し立てである安丸の「通俗道徳」概念について、政治的立場を超えた人びとの日常的な生き方とつながる思想史の視座の獲得をめざす模索から導き出されたもので、「人びとの生活倫理を形成する自己意識の実存的基盤を有効に指し示すという意味で一種の社会科学的概念といえます」(180)、と評価する。そして、安丸の民衆思想史研究の方法は、歴史学と同じく全体を対象としながらも因果律だけに頼らず、「因果律で淘汰される願望や可能性を、ある場合には歴史の残骸の中から」(182)掘り起こしていく問題意識を前面に出している点で、民衆の主体性をその「可能性において」捉えようとする方法意識によって貫かれている、としている。安丸の民衆思想史は、社会科学の認識に一般の人びとの自己形成を引き寄せた内田義彦の場合よりも、一般の人びとの自己形成に寄り添った社会科学のあり方により近づいている、ということになるのだろうか。

第2部では、高度成長期以降の広範な個人主義的自己成長の登場の背後に、生活倫理を形成する自己意識の実存的基盤の変容という規定的論理があることを強調しながら、個としての人格的成長論(第5章)と、集権的で序列的な体制から距離を置いて等身大のところから自己確立と新しい人間関係を模索する事例(第6章)が観察される。

第4章では、「人びとの自己形成の現在を見据え、そこに重ねて、今日の社会学者の立ち位置を観察する」(213)際、著者がどこに焦点を合わせるか、が説明される。人びとの自己形成の現在は、バブル経済の崩壊とグローバル化の進展とともに生じている個人化現象という意識状況にかかわっているが、著者はこの意識状況のなかに、『コミュニティを問いなおす』(広井 2009)の著者である広井良典のいう「社会的孤立」や、文芸評論家、宇野常寛(2011)のいう無数のリトル・ピープルたちの集合よりもより積極的なもの、「旧来の集権的で序列的な価値観から離れ、その意味で等身大のところから個としての内的・志向的掘りどころの確立を求めて、新しい関係を模索する」(214)自己形成のあり方、を見出そうとしている。また著者は、自己の体験や内的対話といった等身大のところから社会的現象の因果関係を捉え直そうとした新潮流の歴史学(民衆思想史)の延長線上で、今日の社会学者の立ち位置を問うことが可能である、と考えている。

第5章では、戦後教育の現場的議論を素材に、個としての人格的成長が高度成長の前と後でどう違って論じられているか、が浮き彫りにされる。具体的には、無着成恭(1927年生まれ)の『山びこ学校』が農村漁村型社会を背後にした高度成長以前の代表的な教育実践として、教育学者・大田堯(1918年生まれ)によって1970年ごろに提唱された「学びながら発達する権利」が、高度成長が生み出した人びとの生活様式の変容を基盤とする教育実践の代表として取り上げられ、人格的成長論の二つの類型が対比的に論じられる。著者が「教育現場の議論を素材にするのは、それが一般の人びとの自己形成にかかわってくることと、それを純化した形でみることができるため」(223)ある。戦後改革期の教育現場を概観する素材として取り上げられた無着成恭の『山びこ学校』は、子どもたちの個としての人格的成長を尊重しながらも、なんらかの帰属集団(人びとの具体的協働)を念頭に置いて実践

した教育の代表例として論じられる。教科書を重視しない無着成恭の自由な教育実践は、生活直結的な通俗道徳的生き方に限定されてはいるが、工夫する力と自分を表現する力を育てることの2点で、子どもたちの個としての人格的成長を計ろうとしていた、と評価される。

次に、『『個』としての人格的成長を抽象的一般的に捉え、『個』の社会的役割を各人が選ぶことを良しとする』(233)大田堯の人格的成長論が論じられる。ここで著者は、新しい生活様式への転換を要請されはじめた広範な人びとの生活倫理を形成する、自己意識の実存的基盤の変容を映し出すシグナルとして、学習指導要領にみられる美術教育の現代化を説得的に論じる。美術教育の現代化とは、日常生活に密着した図画工作教育(図案概念)から日常意識を超えたイメージや観念を提供するデザイン教育への変化である。著者はこの美術教育の現代化のなかに、一方では「産業構造の高度化に対応できる知識・情報と技術、そして美的センスを身につけた人材の育成」(260)という産業界の要請を、他方では、生徒の個としての美的感覚や表現力の育成(一般の人びとの美意識・生活意識の変化)と個としての抽象的一般的な人格的成長(一方向だけにむかわない多面的な展開可能性)を読み取っている。

大田堯の人格的成長論は、協働意識(帰属集団)よりも個としての成長発達にウェイトを置き、公権力的学力観から自立した「教育固有の価値」の論理化を志向するものであり、高度成長を経て生みだされてきた個人主義的な自己形成者——集権的体制の序列的価値観を身につけそれぞれの集団に帰属しつつも、各々の内面性を多様なあり方で模索しはじめた人びと——の広範な登場をその担い手として想定する。大田の「選びながら発達する権利」という教育観は、人間の特性を「常に安定をぎせいにし、不安定の中にかえってダイナミックな安定を見出しつづけながら生きていく」(272)存在として捉えている。ここで興味深いのは、大田が帰属集団に属さない個としての抽象的な人格的成長論を形成していく過程において、過疎化しつつある島や企業城下町の社会調査に従事し、日本社会の階層的秩序という社会の現実と教育実践との関係について考える「社会科学的考察」を経験しながらも、この社会科学的考察を教育固有の価値を論理化するための阻害要因として脱ぎ捨てたことに、著者が注目していることである。著者は第5章の結論として、「子どもの内面にその子固有の権威が築かれていくのを助ける」(283)という、教育実践にとっての社会科学的考察の必要性を、教育学の課題として提起する。

第6章では、ポスト高度成長期に登場した現象である、「等身大」のところから「個」の自己確立と社会的共同性を模索してきた人たちの事例を観察し、「等身大の自己形成が求められるもの」が描きだされる。ここで「等身大」の自己形成とは、高度成長期に生まれた集権的体制の序列的な価値観に与しない「個」としての自立をもとめる、という意味である。それゆえ、1960年代末の学園紛争にその端緒をみることが出来る「等身大」の自己形成は、グローバル化とポスト工業化のもとで企業主義的な集権的体制とそれに忠誠を尽くすことで保障されていた雇用や家族の安定が弱体化し、広範な人びとが「個」としての自立を要請されるようになった、「個人化」の時代における自己形成の展開形態である。著者は、集



権的体制のルールに違和感をもち、制度化された枠組みの外で等身大の自己形成を模索した事例として、在野の哲学者、長谷川宏とその妻の長谷川摂子(1944-2011)が主宰した学習塾である「赤門塾」の実践と、難民救援問題に取り組む国際 NGO・日本国際ボランティアセンター(JVC)を観察の対象とする。前者は国内の動きであり、後者は海外にむかった動きである。

「赤門塾」は、東大闘争にかかわり、丸山真男に代表される戦後啓蒙の社会学者が知識人的知性の特権性に無自覚であることに疑問を抱いて在野の思想家・ヘーゲル研究者として生きる道を選んだ長谷川宏<sup>4</sup>が、生活の糧を得るために開いた小中学生向けの学習塾である。「赤門塾」も学習塾であるかぎり、成績のみで子どもの成長を測る学校教育と受験体制の補完物であることを免れにくい。この塾の特徴は、「授業以外の場でのつきあい」を重視して、春秋の遠足と展覧会見学、夏季合宿、新春かるた会、学年末演劇祭、月例読書会などの、ことばを介した活動や知的研鑽の場を意識的につくっていることである。個人々の知的成長を通して共同性をつくりあげる学年末演劇祭だけは全員の出演が期待されているが、他の行事は自由参加である。夏合宿(当初は6泊7日、のちに10泊11日)は、参加費や炊事・掃除、遊びの企画などを教師と生徒が対等に担い、自炊生活によって日常生活の原型を体験しながら参加者が肩書きや年齢の上下をはずして知り合う場、として位置づけられている。このような塾の活動は塾の卒業生たちの参加によって支えられているが、著者は、塾活動を支える卒業生が次々に生まれてくる要因として、制度化された学校教育のもとでは子どもたちが自分らしさや自発的成長を実現しにくいと感じており、そのような子どもたちにとって塾が「居心地のいい場所」となっていること、を指摘している。

主に学年末演劇祭を通じて30年にわたり塾活動を観察してきた著者は、「赤門塾」の活動のコアに、「言語を軸にしたかかわり」の重視を見出している。新春かるた会は、学校教育の年齢別の言語能力基準とかかわりのないことばにぶつかりながら、子どもたちが知的向上を通して「人間的なひろがり」を経験していく場になっているし、学年末演劇祭は、人生や社会の不条理をテーマとする芝居を通して、塾生や卒業生たちが一種の解決困難な社会問題を疑似体験する機会になっている。また著者は、2011年の秋に亡くなるまで小さい子向けの「おはなしくらぶ」を主催した長谷川摂子の著作『子どもたちと絵本』から、「絵本をよむということは、対等な相手と何かを作りあげる共同作業なのだ気がつく。わたしにはこの対等感がこたえられない」(311-312)という文章を引用している。この文章は、言語を軸にしたさまざまな塾活動が、集まる人たちを地位や年齢、帰属集団とは無関係の

---

<sup>4</sup> 長谷川宏の戦後啓蒙の社会学者、丸山真男へのスタンスは本書の流れを理解する上で重要である。著者は長谷川宏(1977)から、「(敗戦によって)時代がこのましい方向へとおおきく転回しつつあるという認識が、啓蒙思想家丸山真男を誕生させた。」(だが、)「戦後改革が外からもたらされたものだ」という事実は、思想の領域ではことにきびしくうけとめられるべきで、思想としての自由や主体性は、戦前の天皇制ファシズムからはむろんのこと、戦後の民主主義からも距離をおいたところで発想されるほかはなかったのである」(197)という文章を引用している。

「個につきかえす」場をつくりながら、「個としての自立した自己形成とそうした形での他者との共同性の追求」をめざしている、ということを端的に示している。1970年に埼玉県の所沢市に生まれた「赤門塾」が、それぞれの形でかかわった塾生や卒業生や父母における自己形成の要素になって、小中学生の学習塾を超えた人の輪を広げてきたことも、そのような塾の活動を30年以上にわたって観察しつづけてきた著者の持続する思考も、評者には驚きである。

日本国際ボランティアセンター(JVC)は、カンボジアのポル・ポト政権下での大量虐殺と内戦、カンボジアへのベトナムの侵攻などから生じたインドシナ難民を救済するために、1980年にタイで生まれた日本の国際NGOで、現在は東京都に本部事務所を置き、人道支援と地域開発支援に重点を置いて主に9カ国で活躍している。著者は、JVCの設立で中心的な役割を果たした星野昌子や、難民キャンプでの職業訓練所を企画した熊岡路矢、現在の代表・谷山博史、日本に受け入れられた難民に日本語家庭教師コーディネーターとしてかかわった森山久寿子といった人たちの活動や活動の意味を確認しながら、JVCの担い手たちの自己形成のなかに、日本社会の集権的で序列的な価値観に違和感を抱き日本をいったん離れたいという思いが強かったこと、個としての生活者の等身大の目線で現地の人たちとのつながりを模索していること、を見出している。評者にとって印象的なのは、著者が、JVCの30年を超える国際NGOとしての取り組みとそれに自主的に結集した人たちの自己形成を、グローバル経済のなかに多くの人びとが個として放り込まれつつある日本現代史の文脈のなかで考察していることである。以上のような多くの事例観察と周到な引用文から成る第2部は、全体として、人びとの個としての自己形成の展開を観察しながら生活者の側から社会科学者の立脚点を問う作業として位置づけられている。

終章では、グローバル化のもとで従来の集権的で序列的な体制が弱体化し、そこから放り出された人びとが「個」として自立化を要請されているにもかかわらず、一般の人びとの自己形成がむずかしくなっている現在の状況のなかで、社会科学はどういうあり方であれば生活者により有効な役割を果たしうるのか、人びとに要請される「個」としての内的・思考的拠りどころにかかわる社会科学のあり方とはどのようなものか、という本書を貫通する主題が、今日の社会科学者の認識形成上の立脚点との関連で議論される。著者は、自らの等身大の自己形成についての自覚のあり方が研究者の社会像や歴史像の構成に影響を及ぼした、民衆思想史、社会史、女性史の研究者たちの事例の延長線上で、今日の社会科学者の立脚点を、都市部での等身大の個人主義的自己形成とそれを支える地域的周縁性との日常意識には見えていない関係、および、今日の自己形成の多方向性(精神的な領域での多様な選択肢)、という2点に絞って考察する。終章の末尾で著者は、自身の自己形成の社会的立ち位置を見据えながら、人びとが大衆的規模で「個」としての自分の拠りどころを求めようとする状況と現代社会の錯綜した状況とが重なって生起する今日の日本の現実のなかで「社会科学者に要請されていること」について、次のようにまとめている。

社会学者は、みずからの自己形成の立脚点を自覚・明確化することなしには、社会的当事者性という観点から人びとに『見えていないものを見えるようにする』役割を果たしえません。その自覚も、自己意識の実存的基盤にまで及ぶものでなければ、人びとの多方向・多様な自己形成との交流もむずかしいということです。・・・社会学者は、人びとの多方向・多様な自己形成に対して、『個』としての自らの立脚点を対置していくことが要請されている、ということです」(392-393)。

### 3 本書の意義と最終章への若干のコメント

ほぼ以上のように要約される本書は、グローバル化のもとで従来の集権的体制が揺らぎ「個」としての自立化を要請される人びとにとって、内的・思考的拠りどころのための手がかりをうるものが、高度成長期に「個」としての自己形成を模索した人びとよりもさらに切実なものになっている、自己形成の現在を見据えている。主権在民の理念を一人ひとりの意識に主体化しようとしてきた戦後啓蒙の社会科学の知的模索を、内田義彦における視座旋回を参照軸にして観察することを通して(第1部)、また、一般の人びとの自己形成の現場である教育実践と教育理論の変容や、集権的で序列的な価値観から離れて等身大の自己と社会的共同性を模索した実践を観察することを通して(第2部)、生活者からみた社会科学の現在(今日の社会学者の立脚点)を問う。そして、日本の社会科学がめざすべきは「日本の人びとの生活意識に根ざした社会科学、つまり、自生的社会科学の形成」である、と提唱する。「社会科学は今、一般の生活者に対してどういうあり方で存在しているのか、どういうあり方であればより有効な役割を果たしうるか、を考える」(15)という本書の課題は、著者のしなやかな思考と鋭い切り口、現代史の語り部のような文体によって見事に達成されたと考えられる。評者は、社会科学のあり方をこれだけ深く考察できた社会学者は内田義彦以来ではないかと思いながら本書を何度も読んだ。いくつかの引用文(例えば長谷川摂子の文章)には涙を禁じえなかったし、社会科学的思考を脱ぎ捨てて「個としての人格的成長論」を主張した大田堯を観察する描写に感銘を受けた。そして、本書の底流にある、「芸術は見えていないものを見えるようにするのだ」というパウル・クレーの現代美術論に共鳴した。社会科学のあり方をその原点から、これまでまだ誰も試みていない視角から論じきった独創的な研究である本書を読み、社会科学のすごさとそれを研究する醍醐味を久しぶりに味わうことができた。

このような驚嘆すべき本書に評者は付け加えるべきものをもたない。しかし、最終章「生活者の側からみた社会科学へ」の議論が人びとの自己形成の現在から今日の社会学者の立ち位置を問うことに絞られていることに関して、この章で論じるべきことがまだ残っているように思われるので、いくつかコメントをのべておきたい。

第1に、<社会学者は、みずからの自己形成の立脚点を自覚・明確化することなしには、人びとの多方向・多様な自己形成と交流することもむずかしい>、という最終章の結論を了解したとしても、本書が指摘するように、自己との対話を重視する新潮流の歴史学

者たちが視点の多様化と歴史像の分散化に陥ったこと(168)を想起するならば、社会学者がみずからの自己形成の立脚点を明確化することは「生活者の側からみた社会科学へ」の出発点にすぎない、と思われる。個としての自立化を要請される人びとの自己形成の現在において、生活者の内的・思考的拠りどころの手がかりとなりうる社会科学のあり方は、著者が本書第2章で内田義彦の主体化模索の実験における視座旋回として分析した、「系統だった社会科学的認識と個人主義的な自己形成のズレ」をめぐる論点を前提にして、その延長線上で構想されるのではないだろうか。とくに、一般の人びとの主権者意識を形づくる基本的な要件(主体的要件)と系統だった社会科学的認識を形づくる社会科学の構成要件との区別、および前者に後者の要素をも込めた内田の「錯誤」と著者が呼ぶものをめぐる本書の分析は、人びとの生活意識に根ざした自生的社会科学の形成の方法的立脚点になりうると思われる。

第2に、社会科学が根ざすべき<生活意識>の内実にかかわる論点である。本書の第2章と第6章において、著者は、高度成長とともに生じた個人主義的自己形成とその展開形態である、ポスト高成長期における体制的な序列的価値観から距離を置く「等身大の」自己形成に注目して、「個」としての確立の模索が共同性の模索をともなう傾向を観察し、この傾向に注目している。とくに第6章で分析されたような、『個』としての自立した自己形成とそうした形での他者との共同性の追求を「言語を軸にしたかかわり」を通して模索した「赤門塾」の事例は、<人びとの多方向・多様な自己形成> という今日の文脈においても重要な意味をもち続けているのではないだろうか<sup>5</sup>。本書の第2章(105-106)において、著者は、現代社会の多元的で多様なかかわりという文脈において、「個」としての確立、他者との共存、内的・思考的拠りどころ、という自己形成の3つの要素の関連を強調しているが、この関連にかんする論点の展開が最終章の一項目として残されているのではないだろうか<sup>6</sup>。

第3に、本書の最後のページで著者が「マルクス主義には、人間性の根源悪と死について考える枠組が欠けており、そのことがおそらく現代マルクス主義(成立)の困難の由来のひとつとなっている」という安丸良夫の文章(安丸良夫・喜安朗編 2010 ; 231)を引用して言及している点についてである。著者は、この引用のなかのマルクス主義を社会科学に置き換えて読み、現代の社会科学は「人間性の根源悪と死」といった課題を直接背負うことはできないが、それを社会諸事象の因果的関係のなかで考えることで、そういった人間の実存

---

<sup>5</sup> 小熊(2002)第16章「死者の越境」は、小田実の「難死の思想」と鶴見俊輔の「新しい組織論」が個としての自立と国家を超える連帯(共同性)を追求したことを描いているが、この小熊の議論と本書第6章「等身大の自己形成がもつめるもの」とは問題意識を共有していると思われる。

<sup>6</sup> 著者は最終章第1節「社会学者の立脚点と地域的周縁性」において、都市の生活者にとって日常的にはみえていない半周縁・周縁地域との関係を視野におさめることを通して、「個」としての自立と人びとの共同性との新しいつながりの可能性を追求しているように思われる。

性についての見方に寄与することになる、とのべている。この論点は、カール・ポランニーが『大転換』(ポランニー2009[1944])の最終章で言及する死の認識や社会についての認識、あるいは、塩野谷祐一が強調する存在論的解釈学(塩野谷 2012; 296-298)とかかわっている。本書は、生活者の側からみた社会科学にとって、社会諸事象の因果関係を軸とした説明を超える存在論的次元を見据えた思考が必要であることを提起しているように思われる。

第4に、主権在民の理念の一人ひとりの自己意識への定着、あるいは人びとが社会的当事者意識をもつことにかかわる論点についてである。堤未果が新著『(株)貧困大国アメリカ』(堤 2013)において描写しているように、現在のアメリカでは、堤がコーポラティズムと呼ぶ政治と企業との癒着主義のもとで、不適切な形で政治と癒着した企業群によって国民の主権が合法的に奪われている。日本においても、原子力村と呼ばれる政・産・官・学・マスコミによって推進されている原発政策は、エネルギー政策をめぐる主権を合法的に一般の人びとから奪っている。現在における社会科学の主体化模索は、「一人十色」(見田宗介 2012)といった自己形成の多方向性ととも、グローバル企業による一般の人びとからの主権の篡奪という権力の全体化作用の今日的文脈を考慮せねばならないのではないだろうか。評者の今の関心に引き寄せてではあるが、そのように思われる。

以上4つのコメントは、著者と同じ時期に名古屋大学大学院経済学研究科(著者は水田ゼミ、評者は平田ゼミ)で学び、若き日に著者と同じように内田義彦を読みふけり、著者ほどではないが丸山良夫や新潮流の歴史学に関心をもった評者が、本書を読み終わったときに抱いた自身への課題でもある。

#### 参考文献

- 植村邦彦(2010)『市民社会とは何か』平凡社  
内田義彦(1962)『増補版 経済学の生誕』未来社  
内田義彦(1966)『資本論の世界』岩波書店  
内田義彦(1967)『日本資本主義の思想像』岩波書店  
内田義彦(1971)『社会認識の歩み』岩波書店  
内田義彦(1974)『学問の散策』岩波書店  
内田義彦(1981)『作品としての社会科学』岩波書店  
内田義彦(1985)『読書と社会科学』岩波書店  
宇野常寛(2011)『リトル・ピープルの時代』幻冬社  
大田堯(1973)『教育の探求』東京大学出版会  
小熊英二(2002)『<民主>と<愛国> 戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社  
塩野谷祐一(2012)『ロマン主義の経済思想 芸術・倫理・歴史』東京大学出版会  
新藤真知(2011)『パウル・クレー』東京美術  
堤未果(2013)『(株)貧困大国アメリカ』岩波書店

恒木健太郎(2013)『「思想」としての大塚史学』新泉社  
中野敏男(2001)『大塚久雄と丸山真男』青土社  
長谷川撰子(1988)『子どもたちと絵本』福音館書店  
長谷川宏(1976)『ことばの探索』現代書館  
長谷川宏(1977)「戦後啓蒙思想の栄光と挫折——思想的課題としての丸山真男」『日本読書新聞』第1890号  
長谷川宏(1978)『ことばへの道』勁草書房  
長谷川宏(1980)『赤門塾通信 きのう・けふ・あす——こどもたちとの知的共同体を求めて』現代書館  
長谷川宏(2001a)『丸山真男をどう読むか』講談社  
長谷川宏(2001b)『同時代人サルトル』講談社  
広井良典(2009)『コミュニティを問いなおす』筑摩書房  
藤原書店編集部(2013)『われわれの小田実』藤原書店  
カール・ポランニー(2009)[1944]『新訳 大転換』野口建彦/栖原学訳、東洋経済新報社  
丸山真男(1961)『日本の思想』岩波書店  
丸山真男(1964)『増補版 現代政治の思想と行動』未来社  
丸山真男(1976)『戦中と戦後の間 1936-1957』みすず書房  
見田宗介(2012)『定本 見田宗介著作集』VIII、岩波書店  
無着成恭(1969)『山びこ学校』角川書店  
安丸良夫(1974)『日本の近代化と民衆思想』青木書店  
安丸良夫(1996)『〈方法〉としての思想史』校倉書房  
安丸良夫(2004)『現代日本思想論——歴史意識とイデオロギー』岩波書店  
安丸良夫・喜安朗編(2010)『戦後知の可能性——歴史・民衆・両義性』山川出版